

語彙サイズとIELTSスコアとの関係性について

—留学前後に着目して—

日臺滋之*・松本博文*・浅賀圭祐**

要 約

本研究は、推定語彙サイズとIELTSの4技能との間に見られる関係性について研究したものである。9か月間の留学を経験したのべ196名を対象にし、留学前後に、語彙サイズテストとIELTSを実施し、留学前後での語彙サイズとIELTSの4技能と総合スコア（Overall）とを比較した。その結果、以下の3つのことが分かった。一つ目に、留学前の語彙サイズの平均が4,704語から5,212語まで増加し、効果量が大いことが認められた（Cohen's $d=0.874$ ）。二つ目に、留学前の語彙サイズとIELTSの4技能との関係を知るために、ピアソンの積率相関係数を算出し、留学前では、語彙サイズとIELTSの4技能と総合スコアに有意な相関が認められた。留学後では、IELTSのスピーキングを除き有意な相関が認められた。三つ目に、語彙サイズにIELTSスコアのどの技能が影響を与えているのか分析するために、語彙サイズを目的変数、IELTSスコアを説明変数として重回帰分析（強制投入法）を実施したところ、留学前では、リーディングとライティングが語彙サイズに影響を与えていることが分かった。留学後では4技能すべてが語彙サイズに影響を与えており両者の間には関連性があると言えるが、スピーキングの偏回帰係数が負の値となった。

キーワード：語彙サイズテスト、IELTS英語運用能力テスト、語彙サイズと4技能との関係

1 はじめに

学習指導要領（文部科学省 2018a, 2018b, 2019）では、実際のコミュニケーションにおいて必要な語彙を中心に、小学校で600～700語程度、中学校で1,600～1,800語程度、高等学校で1,800～2,500語程度を指導することになり、実際の教科書や教材に掲載する語彙の選定にあたっては、受容語彙・発信語彙の区別をより明確にすることが述べられている。

このような背景を踏まえて、本研究ではコミュニケーション能力の4技能に着目し、4技能を測定するテストとしてIELTS（4.2参照）を使用し、語彙サイズテストとして受容語彙を測定する望月テスト（望月1998; 4.1参照）を活用し、留学前後の語彙サイズと4技能との間にはどのような関係性が見られるのか示したい。

2 先行研究

語彙サイズテストとGTECやIELTSを用いて、語彙と4技能との関連性について調べた調査研究は決して多くない。大湊（2008）では、長岡高専生578名（15～18歳）に対して望月テスト（望月1998）の7,000語レベルまでを実施した結果とGTEC（Global Test for English Communication）の3技能（リーディング、リスニング、ライティング）のスコアを比較した。1年生の平均語彙サイズ2,126語、2年生2,602語、3年生2,930語であった。GTECのリーディングとの間に中程度の相関が認められ、 $r=0.473$ であった。調査方法としてGTECを用いているが、IELTSでも同じ傾向が見られるのかさらなる研究成果を待ちたい。

日莖（2018）では、9か月間の留学を必修とする英語系学科の1つの学年のうち学生60人を対象に留学前と留学後の語彙サイズとIELTSスコアとの関係を調査した。留学前の語彙サイズの平均が4,804語であったが、留学後には5,289語まで増加しており、1%水準で有意差が見られ（ $t(52)=9.282$, $p<.01$ ）、留学後の平均点が高かった。両者間の相関係数を算出した結果、留学前の語彙サイズとIELTSの総合スコア（Overall）の間には（ $r=0.39^{**}$ ）、リーディングの間には（ $r=0.27^{*}$ ）、ライティングの間には（ $r=0.40^{**}$ ）の有意な相関が認められた（ $^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$ ）。また、留学後の語彙サイズとIELTSの総合スコアの間では、（ $r=0.41^{**}$ ）、リスニングとの間に（ $r=0.29^{*}$ ）、リーディングとの間に（ $r=0.43^{**}$ ）、ライティングとの間に（ $r=0.34^{**}$ ）の有意な相関が認められた（ $^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$ ）。しかし、留学前の語彙サイズとIELTSのリスニングとスピーキング、留学後の語彙サイズとスピーキングとの間にも有意な相関が見られなかった。留学前も留学後も語彙サイズとスピーキングの間には有意な相関が認められなかった。この結果は当該年度の学生の一過性のものなのかさらに調査する必要がある。

3 研究目的

本研究では、留学前後での変化を確認したうえで留学前と留学後のそれぞれにおいて、語彙サイズとIELTS英語運用能力テストのスコアの間に見られる関係性はどのようなものであるか調べることを目的とする。

4 研究方法

本研究で使用したデータは、大学2年次の8月または9月から大学3年次の5月または6月までの9か月の留学を必修とする私立A大学B学部英語系学科の連続する3期（3年度）の学生がそれぞれ留学前と留学後に受験した語彙サイズテストとIELTSの結果である。留学前と留学後における語彙サイズとIELTSの双方の結果を比較することにより、語彙サイズとリスニング、

リーディング、ライティング、スピーキングの各技能との関連性を調査したい。

4.1 語彙サイズテストについて

4.1.1 学習者の語彙サイズを測定するということについて

学習者の語彙サイズを推定する際に、Schmitt (2000) が指摘するように、学習者が語彙をどれだけたくさん知っているかという側面 (breadth of knowledge) と、語彙をどれだけ深く知っているかという語彙についての知識の深さを測る側面 (depth or quality of knowledge) の両方から調査する必要がある。さらに、語彙といっても発表語彙と受容語彙といった側面もあり、学習者の語彙サイズを測定することは容易なことではない。語彙サイズを測るテストとしては、Nation (1990, 2001, 2008) の Vocabulary Levels Test (以下、VLT) や、語彙についての知識の深さを測るテストとして Wesche and Paribakht (1996) が広く知られている。

語彙サイズを測るテスト VLT は、選択肢が目標言語である英語で記述されているために日本の中学、高校の初級レベルでの L2 学習者を対象とする英語教育現場では活用しにくい。望月 (1998) は、設問形式が日本語の語彙サイズ測定テストを開発した。この語彙サイズテストは、中学生、高校生の受容語彙サイズを測るテストとして広く利用されている (金谷他 2003, 2004, 望月他 2003)。本稿では、学習者の語彙サイズを測定するために、望月 (1998) による「語彙サイズ測定テスト」(以下、語彙サイズテスト) を活用した。

4.1.2 語彙サイズテストの主な形式について

語彙サイズのレベルは 7000 語レベルまでであり、1000 語レベル (vst 11), 2000 語レベル (vst 21), 3000 語レベル (vst 31), 4000 語レベル (vst 41), 5000 語レベル (vst 51), 6000 語レベル (vst 61), 7000 語レベル (vst 71) と全部で 7 段階に区分されている。

問題形式はいずれのレベルでも同じで、各レベルとも 30 問で構成されている。各レベルから 30 語を取り出して、その 30 語を知っているかどうかをテストすることで 1000 語全体のうち何語程度知っているかを推定する。

各問は、2 つの日本語の訳語が示され、それぞれに該当する英単語を 6 つの選択肢の英単語から選ぶ形式となっている。

本研究のように、7000 語レベルまで実施した場合の語彙サイズの推定は、vst 11, vst 21, vst 31, vst 41, vst 51, vst 61, vst 71 を実施し、その正答数の和を、問題数 (30 × 7) で割り、7000 をかける。以下の計算式で表される。

(各レベルの正答数の合計) ÷ (30 × 7) × 7000

4.1.3 語彙サイズテストの学内での実施方法について

実施方法は以下の通りである。

最初に vst11 と vst21 の問題用紙を配布（両面印刷）。解答は解答欄に数字で記入。解答時間は10分。

続いて、vst31 と vst41 の問題用紙を配布（両面印刷）。解答時間は10分。

次に、vst51 の問題用紙を配布（片面印刷）。解答時間は10分。

次に、vst61 の問題用紙を配布（片面印刷）。解答時間は10分。

最後に、vst71 の問題用紙を配布（片面印刷）。解答時間は10分。

4.2 IELTSについて

IELTS (International English Language Testing System) は国際的な英語運用能力検定試験の一つで、世界140か国、11,000以上の機関で認定され (British Council 2021)、英語圏への留学において必要とされる英語運用能力を有するか判断する際の基準として広く用いられている。日本ではTOEFLやTOEICに比べると認知度が低い傾向にあると言えるが、以前大学共通テストにおける英語外部検定試験の活用が検討された際には、利用できる検定試験の一つとして挙げられている (文部科学省 2018)。また、英語教員採用試験などでも加点の際の参照基準の一つとして用いられることがある。ここ10年ほどでの受験者数の伸びが報告されている (日本英語検定協会 2018)。

試験はリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの4技能についてスキルごとに分かれており、試験時間はそれぞれ約30分+2分 (回答の見直し時間)、60分、60分、11分～14分と、合計約3時間である。スピーキングの試験はTOEFLなどと異なり試験官との対面でのやり取りを通して行われ、ここにIELTSの大きな特徴の一つがあると言える。英語運用能力はスキルごと及び総合ともに1.0から9.0まで0.5刻みのバンド・スコアで表され、数値が高いほど英語運用能力が高いことを意味する。1.0と1.5は「非ユーザー」、2.0と2.5は「一時的なユーザー」、3.0と3.5は「非常に限定的なユーザー」、4.0と4.5は「限定的ユーザー」、5.0と5.5は「中程度のユーザー」、6.0と6.5は「有能なユーザー」、7.0と7.5は「優秀なユーザー」、8.0と8.5は「非常に優秀なユーザー」、9.0は「エキスパートユーザー」とされる。日本の受験者の平均総合スコアは5.8であり (日本英語検定協会 2018)、英語圏の大学への留学時には多くの場合総合スコアで6.5前後が求められる。

4.3 受験者情報とIELTSと語彙サイズテストの実施時期について

IELTSの留学前と留学後の受験者情報と実施時期、及び留学前と留学後の語彙サイズテストの実施時期は以下の通りである。留学Ⅱ期生のみ留学後のIELTSの実施時期が3か月程度遅れ

た。留学先は5大学で、留学期間はいずれも9か月である。

表1 被験者情報とIELTSと語彙サイズテストの実施時期

留学期	留学先大学	留学前実施日		留学後実施日	
		IELTS	語彙サイズ テスト	IELTS	語彙サイズ テスト
I	アイルランド大学A, 米国大学B, 米国大学C, 英国大学D, 英国大学E	10月～12月 (個人受験)	1月21日	7月29日	7月3日
II	アイルランド大学A, アイルランド大学F, 米国大学B, 米国大学C, 英国大学D	12月3日	2月8日	10月13日(台風の影響により3か月遅れでの実施)	7月6日
III	アイルランド大学A, アイルランド大学F, 米国大学B, 米国大学C, 英国大学D	12月9日	2月7日	7月27日	7月10日

4.4 調査方法

留学前と留学後の語彙サイズは大きく変わることが分かっている(日基 2018)。4技能の変化も予測されるので、ヒストグラムによって留学前と留学後の分布の変化を見る。また、留学前と留学後とを分けて、留学前における語彙サイズとIELTSスコアとの関係を調べることで、そしてまた留学後における語彙サイズとIELTSスコアとの関係を調べる必要がある。さらに留学前後でのこれらの関係に違いが見られないか調べる。

語彙サイズテストの結果とIELTSスコアとの間の関係を知るために、二つの検定を用いてその関係を明らかにする。一方は両者間の相関関係を調べるためにピアソンの積率相関係数を算出する。もう一方は、4技能のうちどの技能が語彙サイズに影響を与える度合いが大きいかわかる重帰帰分析によって調べる。

5 結果

5.1 留学前後の語彙サイズとIELTSスコアの変化

図1では、留学期I～IIIの学生196名を対象に留学前後の語彙サイズとIELTSの総合スコアと4技能のヒストグラムを示した。スコアの分布状況から言えることは、留学後は明らかに語彙サイズをはじめ、IELTS総合スコアと各4技能においてもスコアが上がったことでグラフ全

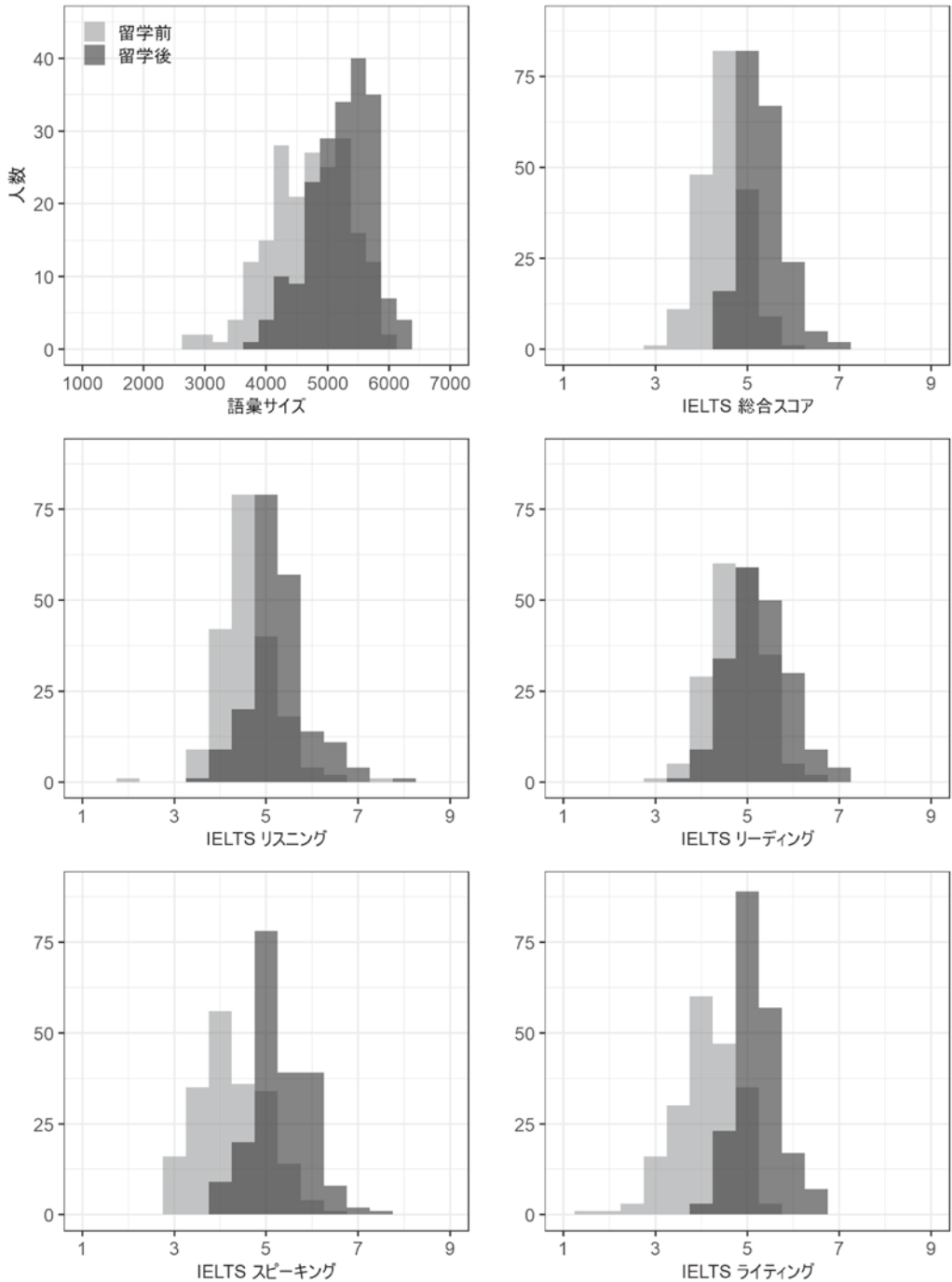


図1 留学前後における語彙サイズ及びIELTSスコアの実績 (N=196)

体が右に移行している。そのため語彙サイズの小さい学習者が減少しているし、IELTSの総合スコアでも英語力の弱い学習者が減少していることが分かる。各4技能についてもその傾向は

同じである。特にライティングの技能が高まったことが分かる。

表2では、上記学生196名を対象に留学前と留学後の語彙サイズについて、比較を行った。対応のあるt検定を行った結果、1%水準で有意差が認められ ($t(195) = 19$, $p < .01$)、また効果量の指標も大きく (Cohen's $d = 0.874$)、留学後の語彙サイズが増加しているのが分かる。留学前の語彙サイズの平均が、4,702語であったが、留学後には5,214語まで増えている。9か月間の留学で、平均508語増加していることが分かる。教育課程部会(2016)では、「外国語教育の抜本的強化のイメージ」として、「現状」では「高校卒業レベルで3000語」、「新たな外国語教育」として「大学や海外、社会で英語力などを伸ばす基盤を確実に育成」するために「高校卒業レベルで4000語～5000語程度」としている。本研究の受験者196名は、旧学習指導要領に基づき、高校卒業までに3000語を学んできた学習者である。その意味において、留学前の4702語は3000語の壁をクリアしていることになる。しかしながら、新たな外国語教育として「高校卒業レベルで5000語程度」を要求されるとなると充足していない状況である。

表2 留学前後における語彙サイズの変化 (N=196)

留学前の平均	留学後の平均	平均の差の検定	効果量 (Cohen's d)
4702 (SD = 659)	5214 (SD = 504)	$t = -19 (p < .01)$	0.874

5.2 留学前後の語彙サイズとIELTS英語運用能力テストの4技能との間の関係性

留学した196名の受験者を対象に、語彙サイズとIELTSスコアとの関係を知るために、ピアソンの積率相関係数を算出した(表3)。分析の結果、留学の前では、語彙サイズとIELTSの4技能のすべてと総合スコアで有意な相関が認められた。特に語彙サイズとIELTSのリーディング、ライティング、総合スコアでは中程度の相関が認められた。

表3 留学前後における語彙サイズとIELTSの相関 (N=196)

	語彙サイズとの相関係数	
	留学前	留学後
リスニングスコア	.364**	.417**
リーディングスコア	.418**	.388**
スピーキングスコア	.295**	.067
ライティングスコア	.424**	.287**
総合スコア	.490**	.389**

(** $p < .01$, * $p < .05$)

一方、留学の後では、語彙サイズとIELTSのスピーキング以外の技能と総合スコアで有意な相関が認められた。

5.3 語彙サイズにIELTSのスコアのどの技能が影響する度合いが高いのか検証する。

Nation (2001:63)によると、語彙の定着には、noticing (気づき) - retrieval (思い起こし) - creative (generative) use (創造的 (生成的) 使用) の一連の3つのプロセスを踏むことが必要であると述べている。その前提に立つとすれば、留学前の語彙サイズには留学前までに学習者が3つのプロセスを通して培ってきた4技能の学習の成果が現れているであろうし、留学後は、留学先の大学で3つのプロセスを通して培ってきた4技能の学習の成果が語彙サイズに現れるものと考えられる。

本研究では、留学前と留学後における語彙サイズにIELTSのスコアの4技能のうち、特にどの技能が影響を与えているのかを分析するものとする。

このことを検証するために、留学期Ⅰから留学期Ⅲまでの学生を対象に、語彙サイズを目的変数 (従属変数)、IELTSスコアを説明変数 (独立変数) として強制投入法による重回帰分析を実施した。結果は以下の通りである。

表4 語彙サイズを目的変数、IELTS4技能を説明変数とする重回帰分析の結果 (N=196)

説明変数	留学前		留学後	
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数
リスニングスコア	84	.081	263**	.338**
リーディングスコア	305**	.274**	83**	.241**
スピーキングスコア	82	.093	-175**	-.219**
ライティングスコア	259**	.270**	203**	.198**
定数項	1441**	0	2738**	0
R ²	.285		.277	

(** p<.01, * p<.05)

表4より、留学前においては、語彙サイズに最も大きな影響を及ぼすものは、標準偏回帰係数を見ると、リーディング続いてライティングであることが分かる。留学後では、語彙サイズに最も大きな影響を及ぼすものは、リスニング、続いてリーディング、スピーキング、そして最後にライティングとなることが分かった。

6. 考察

5.1の図1のグラフでは、語彙サイズの小さい学習者が多いため、グラフのすそ野が左側に

広い。しかし、留学後は語彙サイズが増加し、すそ野が狭くなり、しかもグラフ全体が右側に移行しているのが分かる。IELTSの総合スコア、その他4技能についても、留学後は留学前よりもグラフ全体が右に移行していることが分かる。語彙サイズ、IELTSの4技能において9か月の留学の成果が反映されていることが分かる。留学前後で語彙サイズとIELTSに変化が見られたということは、留学前後の両者間の関係においても違いが見られる可能性があると言える。

5.2の結果から、留学前の語彙サイズは、IELTSの4技能のサブスコア及び総合スコアのそれぞれと有意に相関することが認められた（表3）。そのことから、語彙サイズが大きければ、4技能のスコアも高いということが言えそうである。あるいはIELTSのスコアが高ければ語彙サイズも大きいと言えそうである。留学後の語彙サイズでは、IELTSのスピーキングを除く3技能と総合スコアとの間に有意な相関が見られた。9か月間の留学期間では、留学先での大学の授業はすべて英語で行われ、学校以外でも英語を話す環境であることを考えるとスピーキングに有意な相関が認められなかったことは意外である。その要因として、留学後では語彙サイズが増加するが（表2）、語彙サイズが増加したほどにはスピーキング力が伸びていないことが考えられる。また、語彙サイズテストがスピーキングを測る標識として十分にその機能を果たしているかという問題も考えられる。語彙サイズテストで測定しているのは、単語とその意味についての知識の有無である。Nation（1990）並びにSchmitt（2000）では、語を知っていることとして、単語の意味、単語の綴り字、単語の発音、単語の文法的なふるまい、連語についての知識、単語の使用域、単語の連想、語の頻度についての知識を挙げている。本研究で使った語彙サイズテストで測っているのは単語の綴り字とその意味である。スピーキングの技能においては、単語の発音、単語の文法的なふるまい、連語についての知識も必要とされる。さらにNation（2013）が指摘するように会話を続けるためにはspoken discourseの方略が有効であることも考え合わせると語彙サイズテストではスピーキングの技能について部分的に関連性があると考えてよさそうである。留学後の語彙サイズが増加したから、つまり単語の意味についての知識が増加してもスピーキングで必要とされる技能を十分カバーしているかについてはさらなる研究が必要である。

5.3の表4では、留学後にIELTSのスピーキング・スコアの偏回帰係数がマイナスになっている。これは、学習者が英語を話すことに慣れていないためにIELTSのスピーキング・スコアが低い結果で、尚且つ、その割には語彙サイズの得点が高いというパターンになっていることが数値に反映されているのではないかと考えられる。Nation（2008）では、十分な語彙を持っていないために表現できない学習者と、十分な語彙を持っているにもかかわらず、その語彙をproductive useとして活用できない学習者がいることを指摘している。本研究でのケースはこの後者の学習者に該当するのではないかと考えられる。

7 まとめと課題

本研究は、推定語彙サイズとIELTS英語運用能力テストの4技能との間に見られる関係性について検証したものである。語彙力のある人は英語力があるとか、英語力のある人は語彙力があると思われがちではあるが、その語彙力、英語力をどこまで正確に測定できるかは容易ではない。しかしながら、本研究では広く用いられ比較的信頼性が高いと考えられる語彙サイズテストとIELTSのデータをもとに、その関係性について検証することができた。以下にその成果をまとめる。

- ・留学前の語彙サイズの平均が、4,702語であったが、留学後には5,214語まで増えている。9か月間の留学で、平均508語増加している。また、IELTSの4技能と総合スコアにおいても9か月の留学の成果が反映されている。(図1、表2)
- ・受験者196名の留学前の語彙サイズとIELTSの4技能すべてと、総合スコアでは有意な相関が見られた(表3)。
- ・受験者196名の留学後の語彙サイズとIELTSの4技能とリスニング、リーディング、ライティング、総合スコアでは有意な相関が見られたが、スピーキングでは有意な相関が見られなかった(表3)。
- ・IELTSスコアの4技能のうち留学前ではリスニングとライティングが語彙サイズに影響を与えていることが分かった。留学後では4技能すべてが語彙サイズに影響を与えており両者の間には関連性があると言えるが、スピーキングの偏回帰係数がマイナスであった(表4)。

本研究では、課題として以下の項目が挙げられる。

- ・留学先大学の授業による語彙サイズへの影響またIELTSのスコアの影響については本研究で扱うことができなかったので今後の課題としたい。
- ・本研究で使用した語彙サイズテストは受容語彙を測定するものである。発信語彙や、連語の知識を測定することはできないため限定的な語彙力と言える。語彙力の測定方法についてさらなる研究に期待したい。

謝辞

語彙サイズテスト、IELTSを実施するにあたり玉川大学文学部英語教育学科所属の教員に多くの支援を受けている。また、本研究はIELTSの検定料の一部について玉川大学の学部等改革推進制度の支援を受けている。御礼申し上げたい。

参考文献

- 金谷憲・太田洋・小菅敦子・日基滋之『英語力はどうに伸びてゆくか—中学生の英語習得過程を追う』大修館書店, 2003.
- 金谷憲・太田洋・小菅敦子・日基滋之「Input based vocabulary test (IVT) の開発」関東甲信越英語教育学会第28回東京大会自由研究発表資料, 2004.
- 日本英語検定協会「IELTS白書: 2018年度版」日本英語検定協会, 2018.
- 日基滋之, 4.1 推定語彙サイズと語彙に関するアンケート項目との関係, 「英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究と Can-do リスト作成の試み—2年次報告—」『論叢: 玉川大学文学部紀要』第57号, 2016.
- 日基滋之, 4.1 4技能および語彙サイズの観点からの分析及び考察, 「英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究と Can-do リスト作成の試み—4年次報告—」『論叢: 玉川大学文学部紀要』第59号, 2018.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめのポイント」文部科学省, 2016.
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_3.pdf) (最終アクセス日2022年1月11日)
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 平成22年5月』開隆堂出版, 2010.
- 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編 平成29年7月』開隆堂出版, 2018a.
- 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編 平成29年7月』, 開隆堂出版, 2018b.
- 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編 英語編 平成30年7月』開隆堂出版, 2019.
- 文部科学省「令和元年度「英語教育実施状況調査」概要」文部科学省, 2020.
(https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf) (最終アクセス日2022年1月11日)
- 文部科学省「平成29年度英語力調査結果(高校3年生)の概要」文部科学省, 2018.
(https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf) (最終アクセス日2022年1月11日)
- 文部科学省「各資格・検定試験とCEFRとの対照表」文部科学省, 2018.
(https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf) (最終アクセス日2022年1月4日)
- 望月正道「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」『財団法人語学教育研究所紀要』第12号, 1998, 27-53.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店, 2003.
- Nation, I. S. P. *Teaching and Learning Vocabulary*, Heinle and Heinle, 1990.
- Nation, I. S. P. *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press, 2001.
- Nation, I. S. P. *Teaching Vocabulary: Strategies and Techniques*. Heinle, 2008.
- Nation, I.S.P. *What Should Every EFL Teacher Know?* Compass Publishing, 2013.
- Schmitt, N. *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge University Press, 2000.
- Wesche, M. and Paribakht, T.S. "Assessing second language vocabulary knowledge: depth versus breadth." *Canadian Modern Language Review*, 53, 1996, 13-40.

(ひだい しげゆき)

(まつもと ひろぶみ)

(あさか けいすけ)

On the Relation between Vocabulary Size and IELTS Scores: Focusing on the Scores Before and After Studying Abroad

Shigeyuki HIDAI, Hirobumi MATSUMOTO, Keisuke ASAKA

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relation between the vocabulary size of a group of students and their IELTS scores. The subjects were 196 students in total who studied abroad for 9 months in 3 academic years. Both the vocabulary size test and IELTS were conducted before and after studying abroad and the results of their scores were compared.

As a consequence of nine-month study abroad programs, the average vocabulary size increased markedly from 4,704 to 5,212 words (Cohen's $d = 0.874$).

We used the Pearson product-moment correlation coefficient test to compare the vocabulary size and IELTS scores (i.e. Overall scores and subscores) before studying abroad and there were significant correlations between them. In the case of the vocabulary size and IELTS scores after studying abroad, we found significant correlations between them except in the Speaking score of IELTS.

A multiple regression analysis was also performed among the 4 subscores of IELTS and the scores of the vocabulary size test before and after studying abroad respectively. Before studying abroad, Reading and Writing scores were significant factors in explaining the vocabulary size. After studying abroad, all four subscores of IELTS were significant factors in explaining the vocabulary size. It should also be noted that the partial regression coefficient of Speaking scores was negative.

Keywords: vocabulary size test, IELTS, relation between vocabulary size and IELTS score